



92年、京都大学工学部に留学したケニア人の若手講師。博士号を取得し、帰国後には土木工学分野の指導者として活躍した



現在も実習に力を入れるジョモ・ケニヤッタ農工大学。学生たちの表情は生き生きとしている

大統領の思いを形に

1960年代、長年、植民地支配に苦しんできたアフリカ諸国が、次々に独立を果たした。東アフリカのケニアもその一つ。63年にイギリスから独立し、この独立運動を指揮したジョモ・ケニヤッタ氏が初代大統領に就任した。

そんな彼が、新たな国づくりに欠かせないと考えていたのが、人の国の重要な産業である農業を支援、工業化を進める技術者がなんとしても必要だった。しかし当時のケニアでは、人材育成の拠点となる大学はおろか、指導に当たる講師の数も足りていなかった。そこで白羽の矢が立ったのが日本だ。当時、高度経済成長の原動力となる人材を輩出していた日本の大学。そのノウハウを携え、77年からケニアの一大プロジェクトに協力することになった。それは、首都ナイロビから北東に約35キロ、東京ドーム約40個分の広大な野原に、一から大学をつくらうというもの。その名も「ジョモ・ケニヤッタ農工大学」だ。

まず着手したのが校舎の設計だった。教室、実験室、学生宿舎などを建設し、授業で使う農業機械や実験器具なども供与。何もなかった野原は、見違えるように生まれ変わっていった。

日本型教育で学生を鍛える

81年、念願かなって開校を果たしたジョモ・ケニヤッタ農工大学。しかし、ふたを開けてみると、「学生たちは国家試験に受かるために、暗記中心の勉強をしています。自分で考え、応用する力がなければ、真の技術者とはいえません」。プロジェクトの日本側の代表者である京都大学の中川博次名誉教授と岡山大学の岩佐順吉名



誉教授は振り返る。やはり、このままでは意味がない。中川教授らは方針転換をし、一から教育方針を練り直すことに。日本の大学のように、まずは数学、物理、化学などの基礎科目に重点を置き、それから実習に入る内容に変更した。しかしこれには、ケニア政府の教育担当者などが「自分たちの教育方針とは異なる」と猛反発。学生たちも「これでは国家試験に受からない」と不満を漏らすようになった。

そして、工学部は京都大学が、農学部は岡山大学が中心となり、カリキュラムの作成も始まった。ケニアでは、溶接工や自動車整備など職種ごとに国家資格を取らなければ、仕事に就くことができない。資格のレベルで給料も決まってしまう。ケニア側の強い意向を受けて、カリキュラムも資格取得を見据えたものになった。

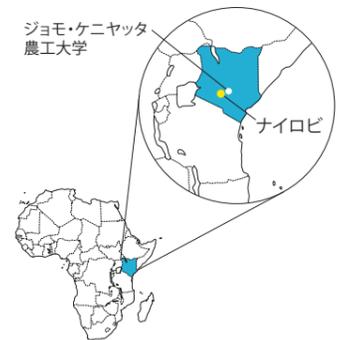
それでも中川教授らの信念は揺らがなかった。批判にさらされながらも、一年、また一年と、忍耐強く、基礎の重要性を訴え続けた。すると徐々に、その努力の成果が実を結び始める。学生たちの国家試験の合格率が激増したのだ。「目先の試験勉強ではなく、日本型の地道な基礎教育と実技教育が認められたのです」と中川教授は強調する。

また、同時に取り組んでいたのが、ケニア人講師の育成だ。その

受け継がれる人づくり

1963年に独立を果たしたケニア。当時、ジョモ・ケニヤッタ初代大統領は、新たな国づくりを担う人材を求めている。その学び舎となる大学設立のパートナーとなったのが日本の教授陣だった。

[上]ダニエル・アラップ・モイ2代目大統領(右から4人目)と、大学づくりの旗振り役を務めた中川教授(右から3人目)、岩佐教授(右端)
[下]現在は、3万人以上の学生が通うケニア有数の大学に成長



受け皿となったのが日本への留学制度。しかし、彼らが日本から帰ってくるまでには4、5年かかる。そこで講師不足を補うために、日本から野菜栽培や食品加工、機械整備などに精通した専門家や青年海外協力隊員が派遣され、講義の一部を担当。現地の講師たちには授業の方法を伝えた。84年から3年間、青年海外協力隊として農地の測量や製図などを教えた長谷川庄司さんは、「私が担当したのは、30人ほどのクラス。初めは教科書もなく苦労しましたが、国の将来を担う人たちに教える仕事はやりがいがありました」と語る。



農業に欠かせないトラクターの操作方法を学内で学ぶ女子学生